日本語における時間用法としてのアト、マエ

深　見　兼　孝

1．はじめに

この小論は、時間を表すアト、マエの用法を分析し、そこに見られる時間の把握の仕方を探ろうとするものである。

2．問題設定

『広辞苑』は慎重だが、時間を表すアトは「跡」の転用であろう[1)]。「跡」は本来は、何かの移動の結果、「足跡」のようにその後方に残ったモノを意味し、それが、時間を表すのにも転用されていると仮定しておきたい。その移動する何かを時間に置き換えたとすると、過ぎ去る時間の後方に残るのは「過去」であるはずである。ところが、「ある出来事のアト」に属す時間帯は、「ある出来事」の発生時から見た場合、「ある出来事」がまだ発生していない時間帯（未来）である。一方、マエは本来空間を表す語である。人や動物の目のある方向にある空間を表し、これが時間を表すのにも転用されると仮定しよう。しかし、「ある出来事のマエ」に属す時間帯が、「ある出来事」の発生時から見た場合、「ある出来事」が既に発生した時間帯（過去）であることと、人や動物の目のある方向にある空間とは容易に結び付かない。マエが人や動物の目のある方向にある空間を表すことから派生した、物体の移動の方向を表すとしても、その移動する物を時間に置き換えてしまうと、アトと同種のジレンマに陥るだけである。したがって、アトとマエには、時間が過去から未来へ進むという見方とは異なった認識が反映されているに違いない。

また、従来時間を表すアト、マエの細かい用法が十分に検討された訳ではないように思える。実際、修飾語や助詞との関連で、同じアトでも意味の具体性に微妙な変化があるように思える。特に、アトが全く時間的な相関性を表す場合は、修飾語が必要である一方、助詞が現れないことがある。同じ時間を表すアトでも名詞らしさの程度に差が生じていると言える。また、同じ時間を表すマエでも同様なことが生じていると想像されよう。詳細な検討が必要である。それによって、アトとマエにどのような時間認識の仕方が反映しているか明らかにすることができるだろう。

なお、今回はアト、マエが主に統語関係を形成する場合に限る。複合語や独立した句を形成する場合は、別途考察が必要であろう[2)]。

3．修飾語を受けていないアト、マエ

アト、マエに何の修飾語もない場合[3)]、その後に付加される助詞などは次のようであった（「φ」は後に何も付加されないことを示す。以下同様）。

アト：ガ(3)、ヲ(2)、ニ(8)、デ(18)、ヘ(1)、カラ(11)、ノ(3)、ハ(20)、ダ(1)、φ(1)計68
マエ：ニ(17)、カラ(9)、ヨリ(4)、ノ(31)、φ(1)　計62

3-1　ガ、ヲとの結合

アト、マエは本来名詞であるから、単独で格助詞を伴い、文の成分になりうるはずである。特に、格助詞ガ、ヲが結合しうることが、典型的な名詞であることを保証すると思われる。しかし、アトには格助詞ガ、ヲの結合例があったが、マエにはなかった。このことは、アトが時間に転用されても、本来の「移動の結果、その後方に残ったモノ」という意味との強い関連性を保ちうることを示唆するだろう。これに対して、時間に転用されたマエは、本来の「目のある方向にある空間」とは意味的にある程度の距離が生じている可能性がある。また、このことは、アトに比べマエの方が、付加される助詞の種類が少なく、固定化の傾向にあることからもありそうなことである。とりわけデが付加された例が見当たらないのは、空間とは意味的に距離があることの反映であろう。

次はアトに格助詞ガ、ヲが付加された例である。

１）後が気になってか、礼次たちはひる前に帰って来た。(完全な遊戯03506)
２）こんなわけで、トモエのみんなは、「らく書きや、いたずら書きをしたら、あとが大変！」と知っていたから、講堂の床以外では、しなかったし、第一に、一週間に、二度くらいある、この授業で、らく書さの楽しみは、もう、充分に満たされていた。(窓ぎわのトットちゃん25601)
３）それにまだあとがつかえているし、順番がまわってくるのは数ヶ月先になるでしょう(日本沈没（上）16315)
４）しかしもう感嘆の囁きは聞こえませんでしたので、がっかりしたように後をつづけました。(壁05317)
５）ユルバン教授がポケットから双眼鏡を取出して後をつづけました。(壁13005)

これらの例のアトは時間そのものだけではなく、アトに起きた（起きる）出来事を指している。時間と出来事の両方を含むであろう。例えば、1)では「礼次たち」はいったん家を出ているのだが、その後に起こったかもしれないことをアトと言っている。単にその後に起こったかもしれない、というだけではなく、もし起こったとすれば家を出た結果であると認識されている。だから、「帰って来た」のであろう。5)では「ユルバン教授」はある出来事の実況報告をしているのだが、それまで行ってきた実況の次の実況がアトと表現されている。次の実況は当然前の実況の続きであり、両者は強い関連を持っていると言える。このように、これらの例のアトは、古い出来事の結果としての新しい出来事を意味しており、移動の結果生じるモノとしての意味に近いと言える。人は過去の記憶の上に新しい記憶、あるいは古い経験の上に新しい経験を積み上げていくので、古い方から順にいって、新しい記憶・経験がアトとなるのであろう。

3-2　その他の格助詞との結合

動詞ノコルは場所を表す補語（二でマーク）を取る。次の例のアトは「(砂が）指の間

からさらさらと流れ落ちた」という出来事が生じた時間のアトであると同時に、その結果生じた（何の感触もない）場所と解釈される。

６）砂は指の間からさらさらと流れ落ちて、後になんの感触も残りませんでした。(壁02515)

ナイも場所を表す補語（二でマーク）を取る。次の例でも同様の解釈が出来よう。

７）深海底の水は澄みきっており、泥の雲が、波うちながらうすれてしまうと、あとには光の道筋を反射する懸濁物が、ほとんどないのだった。(日本沈没（上）08813)

このように、述語が場所を表す補語を取る場合は、アトがその前の出来事の結果生じた場所と解釈できる。上で見たアトに近いと言えよう。

しかし、その他の二が結合した例ではアトは時間の概念だけ表し、「何かの結果生じた」という意味は含まれないように思える。一例だけあげる。

８）自分が食うに困るほどの破綻に追いこまれても仕送りをたやすようなことはぜったいしなかったが、それはあとになって考えると事務家としての正確への熱度が主であったようだ。(裸の王様18006)

他の格助詞が結合した場合も、時間の概念のみを表しているように思える。若干の例を示す。なお、最後の例12)の「アトへゆく」の主語を敢えて想定するとすれば、「我々」か「時間」であろう。前者であれば、我々も時間の中を進むという発想があることになるが、これについてはここでは追求しないことにしたい。

９）それが悪かったのだと、彼女はあとで述懐している。(一年半待て49522)

10）そんな気がしたなんて、後からいくらでも言える乙女の感傷だ。(キッチン15010)

11）あとの結果を考えると、それもいくらかは、さと子に責任があろう。(一年半待て49509)

12）そのうえ、災害がおさまったあとでも、この巨大な、あまりに何もかも集中し過ぎた首都の機能麻痺は当分つづくだろうし、不穏な情勢は、むしろあとへゆくほどたかまるだろう。(日本沈没（上）36007)

一方、マエには時間の意味しかないように思える。以下若干の例を示す。

13）前から好きだった映画俳優のＲが、一度米井へ来てからは熱を上げて、部屋にはその写真を一杯飾っている。(橋づくし31210)

14）前に行ってた学校の受持ちの女の先生は、顔がきれだということ。(窓ぎわのトットちゃん03108)

15）「田辺の彼女が、前の彼女っていうの？（キッチン03514)

アトと若干違うのは、アトが文脈から比較の基準時を推測しやすいのに対し、マエは、基準時を示すものがなく、基準時は発話時と理解されるのがほとんどである。これも、アトが本来移動の結果残るものを表し、その移動するものとの比較を前提にしており、時間用法に転用されてもそれが残るからであろう。これに対し、マエは修飾語がなければ比較の基準を示せないのであろう。その意味でも、マエは本来の空間用法とは距離があると言える。さて、通常、我々は目のある方向へ移動し、その方向がマエであるように、あるもの

が移動している場合、通常その移動の方向にある部分がマエと把握される。このマエの意味は目のある方向としてのマエから派生されたものと考えられる。我々は経験を古い順に記憶するので、新しい経験は次々に古い経験となってしまう。つまり、ある経験はどんどん過去へ移動することになる。この移動の方向がマエとなり、マエが古い時間を表すことにつながるのであろう。このように、マエは目のある方向の空間から派生された意味と関連づけられ、意味の抽象化がアトより進んでいると言えよう。

3-3　裸のアト、マエ

時間用法の一例ずつがあった。以下に示す。

16）佐石の語ったところによると、佐石は東京生まれで幼時両親を関東大震災で一時に失い、伯父に養われて青森県の農家に育ち、昭和九年の大凶作に十六歳で北海道のタコ部屋に売られ、後転々とタコ部屋を移り歩いた。（氷点（上）05703）

17）すべてが片づいた私の部屋に射す光、そこには前、住み慣れた家の匂いがした。（キッチン04616）

これらの例のように、アト、マエが何ら助詞の付加なしに文の成分になっているのは、意味的にも副詞に近くなっていることの現れである。

以上のように、修飾語の修飾を受けないアトは本来のモノ的意味に近い用法を示す一方で純粋な時間的用法も持ちうる。これに対し、修飾語の修飾を受けないマエは同じ空間用法でも、空間的移動の方向と関連づけられた時間的用法を持つ。また、アトは純粋に名詞としての性質から副詞的な性質まで持つが、マエはアトに比べると、名詞としての典型さに欠けていると言えよう。

4．修飾語を受けているアト、マエ

修飾語と付加されている助詞等は次のようであった。時間を表す名詞を「時間語」と名づけた。時間語は、一定の時刻を表す場合を除き、アト・マエの前に直接おかれても、助詞を介在しておかれても、どのくらいアト・マエかという副詞的な働きをしていたが、本来の副詞とは一応区別している。ただし、助詞の介在有無は考慮していない。

アト

	ガ	ニ	デ	カラ	ト	ノ	ハ	モ	ダケ	ダ	カ	φ	計
名詞													
〜の			4			4	1		2	2		23	36
〜より								1					1
指示詞	1	5	4	2		6	3	2				16	39
副詞			1	3		1						1	6
時間語		2						1					3

接続詞							1						1
名詞＋副詞												2	2
指示詞＋副詞		2		1									3
動詞・形容詞		1	11		1	7	1	4			1	42	68
計	1	10	20	6	1	18	6	8	2	2	1	84	159

マエ

	ガ	ニ	カラ	ヨリ	ト	ノ	ハ	モ	マデ	ダ	ミタイ	φ	計
名詞													
～の		4	1		1		3	1					10
直接			1		2	7	1			2		1	14
～より		1											1
～を		1											1
指示詞	1	6			1	7		1	1		1	5	23
副詞		1	6			3			1			3	14
時間語		26	12	2	5	16			4	8		30*	103
時間語＋副詞										1			1
動詞・形容詞		31	6			4	2			2		3	48
～より		3											3
計	1	73	26	2	9	37	6	2	6	13	1	42	218

*は時間語が一定の時刻を表す場合も含む。

修飾語を受けない場合と違って、アトに格助詞ヲ、ヘが付加された例が見えない半面、マエに格助詞ガが付加された例が見える。アトの方が格助詞の制限がわずかながら多くなっているように見える。また、アトの後に何も付加されない場合が半数以上(84/159)あるのに対し、マエの後ろに何も付加されないのは全体の約20%(42/218)である。このとから、修飾語を伴う場合、アトの方がマエより文法化が進んでいると推測される。

4-1　「名詞＋の」の修飾を受けたアト、マエ

4-1-1　アト

「名詞＋の」が修飾語である場合、後に結合する助詞の類に関係なく、アトが出来事としての意味を含んだ例は見当たらない。すべて、時間概念しか表していない例のみであった。後ろに何も付加されず、副詞的に成分になっている例が約64%(23/36)あり、本来の名詞から遠く離れていると言えよう。若干の例を示す。

18）入学式のあと、ヴィズウがあった。(白い人15509)

19）あんな事件のあとだからな。(氷点（上）10912)

20）それで恋がかなうわけでもないのに、朝のあの電話の後ですぐに私のことを調べて、仕事場をつきとめ、住所を控え、どこか遠くからここまで電車に乗ってくる。（キッチン10111）

21）まるで徹夜の後の耳鳴りのようでした。（壁05806）

4-1-2　マエ

「名詞＋の」が修飾語である場合、マエの後に何も付加されない場合が見当たらなかったのは注目に値する。この場合が、マエの空間的な用法に一番近いのではないかと思われる。

マエの空間用法において、目のある方向にある空間は、他者に投影され、他者の目のある方向、つまり他者の向いている方向にある空間ともなりうる。このとき、誰のもしくは何の前かは「名詞＋の」で示されるであろう。よって、時間用法においても、「名詞＋の」の名詞が表す何らかの行為や出来事がどこかを向いているとしたら、そちらがマエであろう。それは、その行為や出来事の始まりの方で、記憶としては古い方である。我々は、古い方から順に記憶を重ねていくが、古い出来事（記憶）の方をマエと言うのである。これは、ちょうどアトが新しい出来事を古い出来事の結果と把握するのと逆である。22)において「お弁当」を食べはじめるのが（食べ終わりより）古い出来事なので、それより古い出来事－歌を歌うこと－がマエである。他の例も同様に考えることができるだろう。

22）だから、この学校の卒業生は、随分と大きくなるまで、このメロディーは、お弁当の前に歌う歌だと、信じていたくらいだった。（窓ぎわのトットちゃん05510）

23）第一次大戦の前からすでにイデオロギーの危機といわれていて、（文学部唯野教授13309）

4-2　他の修飾語を受けたアト、マエ

4-2-1　アト

指示詞が修飾している場合、指示詞が照応する出来事の時間より新しい時間を、動詞が修飾している場合、その動詞を含む節の表す出来事の時間より新しい時間を表す。

アトの場合、特に、指示詞の修飾を受ける場合、「名詞＋の」の修飾を受けた場合より、格助詞の種類が多く現れ、後に何も付加されないのも約41％(16/39)と、比較して言えば、少ない。また、指示詞の修飾を受ける場合、時間概念とともに「結果として生じたもの」の意味も含む例が見受けられる。以下がそうである。

24）「‥‥本当はね、エヘエヘエヘ‥‥。」と書いた文字を読むような笑いだけを残して唇はひっこみ（唇だけか顔ごとか、それはよく分りませんでした。）その後に大きな目玉が現われました。（壁02402）

25）おお、大怒濤‥‥その後に、黒々とした渦まく水面‥‥（壁14117）

26）鼬は死にものぐるいの最後の悪臭、凄まじい臭気をはなちながら絞め殺され、父のナイフの鋭く光る刃先で小さくはじける音をたてながら皮が剥がれると、そのあとには真珠

色の光沢をおびた筋肉にかこまれた、あまりにも裸の小さく猥らな躰が横たわる。（飼育12208）

これらの例では述語が格助詞二の付いた補語を要求する動詞である（25)は動詞がないが、アラワレル等を補うことができよう)。修飾語の修飾を受けないアトがそうであったように、これらの例では前の出来事の結果生じた場所の概念も含む。よって、やはり、本来のアトの意味に近いものと考えられる。

しかし、その他の二が結合した例ではアトは時間の概念だけ表し、「何かの結果生じた」という意味は含まれないように思える。一例だけあげる。

27）災害に対する一時の「伝統的」反射も、この災害の全貌がはっきりしてきたら、そして、そのあとに発生してくる膨大な問題の処理に直面したら‥‥はたしてどこまでつづくだろうか。（日本沈没（上）36912）

他の場合も、時間の概念のみを表しているように思える。若干の例を示す。

28）つまり、さと子さんの拒絶の状態が半年ばかりつづき、そのあとで要吉君と静代との交渉がはじまったのです。（一年半待て50210）

29）唇だけは避けなければ、そのあとの自分に自信がなかった。（氷点（上）01401）

30）数人の子供たちの姿は消えた。そのあと、首領はだしぬけにペックのほうをむいて言った。（天井裏の子供たち11906）

とりわけ、30)のように、後に何ら付加されず副詞的に用いられる用法の比率も、「名詞＋の」の修飾を受ける場合より少ないとはいえ、かなりあり、文法化の程度が異なるものが混在していると言えよう。

また、動詞の修飾を受ける場合は、時間概念のみを表し、さらに後に何ら付加されない場合の比率が約61.8%(42/68)と上がり、文法化が進んでいると言えよう。一例を示す。

31）埋めるべき空間を埋めたあと、もはや、なにを為していいかのかわからない。（白い人17012）

一方、副詞や時間語の修飾を受ける場合、副詞や時間語が時間的程度を表し、その程度の新しい時間を表す。全体として副詞的な意味合いが強くなるが、アトが本来比較の基準を内包しているとすれば、意味的には修飾語を受けないアトとほとんど変わるところはないと言える。一例だけ示す。

32）山崎さんは、すぐあとから、連絡機で来ます。（日本沈没（上）28706）

4-2-2　マエ

指示詞が修飾している場合、指示詞が照応する出来事の時間より古い時間を、動詞が修飾している場合、その動詞を含む節の表す出来事の時間より古い時間を表す。この二者は、時間的位置の限定を受けるという意味で、「名詞＋の」の修飾を受ける場合に近い。つまり、本来の名詞としての性質を維持していると思われる。一方、副詞や時間語が修飾している場合は、副詞や時間語が表す程度の古い時間を表す。これは、修飾語の修飾を受けな

い場合に近いが、時間的な程度の意味が付加されるために、より副詞的な性質を帯びているものと推察される。次の例を見られたい。

33）「ちゃんとお金をはらって行きました。」‥‥「でも、その前に‥‥。」（壁05707）

34）そして、そのレモン色が褪せるまえに、街は石膏のひろがりに変化してしまう。（鳥獣虫魚43011）

35）「地震予知については、だいぶ前から、かなりの国家予算を注ぎこんで、研究していたはずだが‥‥」（日本沈没（上）15306）

36）高木、夏枝は七年前にわたしを、うらぎっているのだ。（氷点（上）23418）

33)のソノは前文の「ちゃんとお金をはらって行きました」と照応しているが、「そのマエ」はその出来事の開始部より古い時間である。物事を古い順に記憶していく我々にとって、物事の開始時の方向がマエだからである。34)のように動詞が直接修飾する場合も、その表す出来事の開始時の方向、つまり古い時間帯がマエである。これらは二つの出来事の時間的関係を表す。一方、35)や36)のように、副詞や時間語の修飾を受ける場合は、3-2で見た修飾語の修飾を受けないマエと同じ解釈ができる。すなわち、基準時が発話時と解釈され、ここに視点が置かれるために、物事（の記憶）が次々に移動していく方向、つまり過去がマエなのである。修飾語の修飾を受けない場合と違うのは、基準時（発話時）との幅を副詞や時間語が表していることだけである。したがって、実質的な意味は副詞や時間語が担い、マエは方向を示すのみである。全体として副詞に近い。このように、マエに限定的な修飾語があって基準時が明示される場合と、そうでない場合は、関連づけられる空間用法に差がある。しかし、両者は記憶が古い方がマエであるという、共通の基盤を持っていると言える。

指示詞や動詞の修飾を受けている場合、後に何も付加されない場合が、それぞれ、約22％(5/23)、６％強(3/48)であった。しかし、前者の例はすべてコノの修飾を受けており、しかも次の例が示すように、コノマエ全体で発話時が基準になる単独のマエとほぼ同じ意味を表す。これを除外すれば、指示詞の修飾を受けているときに、後に何も付加されない例はなかったということになる。

37）と、いうのはさ、この前話したような、フッサールが『この世界についての常識を基礎にして論じてるから、（文学部唯野教授15514）

一方、副詞と時間語の修飾を受けている場合、後に何も付加されない場合が、それぞれ約21％(3/14)、約29％(30/103)である。このことは、指示詞や動詞の修飾を受けている場合が、本来の名詞に近く、副詞や時間後の修飾を受けている場合は、副詞的な性質を帯びるという、上の推察がほぼ正しいことを示しているだろう。

しかし、副詞、時間語の修飾を受けた場合、付加される助詞の種類から言えば、「名詞＋の」の修飾を受ける場合より少ないとは言えないように思える。また、動詞の修飾を受ける場合、付加される助詞の種類は少ない。このように、マエは、付加される助詞の種類

と後になにも付加されないことが対応していない。さらに、指示詞の修飾を受けたマエには格助詞ガが付加された例が１例ながら見える。それが次の例である。

38）その前があるのなら何故先に言わんのだ。（壁05709）

このマエはある出来事（上の33)の「お金を払ったこと」である）より時間的に古い出来事を指しており、単に時間概念だけでなく、出来事の概念も含む。これは、マエが他者のマエであって、本来修飾語があってこそ安定すると仮定すれば、指示詞の修飾を受けることで、本来の空間的意味に近い、時間的にマエに起こった事柄という意味を獲得したのであろう。いずれにせよ、マエは複雑な様相を呈しているようだ。

以上のように、修飾語の修飾を受けている場合、指示詞の修飾を受けたアトが本来の意味に近い意味を表す場合もあるが、全体として文法化が進んでいると言える。その順は、指示詞の修飾を受ける場合、「名詞＋の」の修飾を受ける場合、動詞の修飾を受ける場合である。一方、マエは、「名詞＋の」の修飾を受ける場合が、本来の空間を意味するマエに一番近く、指示詞や動詞の修飾を受ける場合がこれに続き、副詞や時間語の修飾を受けている場合は、修飾語の修飾を受けない場合と同じ程度に意味の抽象化が起こっているものと考えられるが、付加される助詞の様相を加味しつつさらに検討が必要である。

５．結論と今後の課題

アトもマエも、修飾語を受けるか受けないか、受けるとすればどんな修飾語を受けるかによって、本来の名詞としての性質と意味に差が見られ、それは後に付加される助詞や、あるいは何も付加されないかということと、ある程度の関連性があることが分かった。また、アトとマエの時間的意味は、我々の記憶が古い方から新しい方へと順に積み重なることを基盤にしているものと考えられる。通常は、これが因果関係の連鎖の流れとなり、時間が過去から未来へ流れると認識されるのだろう。しかし、アトとマエから見えることは、その時間の進む方向がマエというような、空間（移動）の方向の単純な移しかえではないということである[4)]。

本稿ではアト、マエに付加される助詞等について、すべてを検討できたわけではない。また、アト、マエを修飾する、頻度の高いいくつかの修飾語を取り上げることができただけである。今後の課題としたい。

注

1) 『広辞苑』では「後」の項目に、「跡」の意の転か、とある。

2) しかし、アト、マエが複合語の右側の成分である場合は、左側の成分の被修飾要素なので考察の対象とした。左側の成分である場合は、アトバライのように「アトで支払う」のような時間的に新しいアトとアトモドリのように過去へ向かってのアトがあって一様ではないように思える。アト、マエが左

の成分になって複合語を形成する場合については、井上(2008: 74-77)、崎山(1999: 237-238)が研究の出発点になろう。

3) 次の文学作品を資料にした。資料にした版と初版が異なる場合は／で示した。また、用例もこれらの中から採った。用例の後の（　）中の数字は左三桁が該当個所のページ、右二桁が行である。

安部公房『壁』新潮文庫あ-4-2、新潮社2005年／1969年

石原慎太郎『完全な遊戯』新潮文庫（草）119Ｃ、新潮社1978年／1960年

遠藤周作『白い人』：小田切進（編）『日本の短編小説　昭和（下）』潮文庫97Ｄ、潮出版社1977年／1973年

大江健三郎『飼育』：大江健三郎『死者の奢り・飼育』新潮文庫お-9-1、新潮社2004年／1959年

開高健『裸の王様』：開高健『パニック・裸の王様』新潮文庫か-5-1、新潮社2004年／1960年

北杜夫『天井裏の子供たち』新潮文庫（草）131Ｎ、新潮社1979年／1975年

黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社文庫く$\frac{10}{1}$、講談社2004年／1984年

小松左京『日本沈没（上）』光文社文庫こ21-1、光文社2000年／1995年

筒井康隆『文学部唯野教授』岩波書店1990年

松本清張『１年半待て』：『松本清張短編総集』講談社1971年

三浦綾子『氷点（上）』角川文庫5025（み5-3)、角川書店1998年／1982年

三島由紀夫『橋づくし』：小田切進（編）『日本の短編小説　昭和（下）』潮文庫97Ｄ、潮出版社1977年／1973年

吉本ばなな『キッチン』角川文庫10713（よ11-8)、角川書店2007年／1998年

吉行淳之介『鳥獣虫魚』：小田切進（編）『日本の短編小説　昭和（下）』潮文庫97Ｄ、潮出版社1977年／1973年

4) 日本語は空間を表すアト、マエを時間用法に転用しているが、朝鮮語は空間のマエ／アトはaph/twiであるのに対し、時間のマエはaphではなく漢語系のcɔn（前）を用いる。その一方で、時間のアトはtwiと漢語系のhu（後）の両方を用いる。空間としてのマエ／アトと時間としてのマエ／アトの語彙的な関連性は言語によって異なるものと想像される。また、時間的なマエ／アトが空間的上下と語彙的に関連する言語もあるという（崎山1999参照）が、日本語でも「時間を遡る」とか「時代が下る」のような表現をし、興味深い。言語に現れる時間と空間の関連性は、一般言語学的にも追求すべきテーマのように思える。

言及した文献

井上京子(2008)「言語と身体性」：唐須教光（編）『開放系言語学への招待』慶應義塾大学出版会.

崎山理(1999)「オセアニア・東南アジアで流れる言語的・文化的時間」：長野泰彦（編）『時間・ことば・認識』ひつじ書房.